「戦争はなぜおこるの？ 平和をどうまもるの？」

菊埼　威

はじめに

長岡では、毎年夏から秋にかけて「ながおか平和のための戦争展」を長岡市庁舎のある「アオーレ長岡ホワイエ」で開いています。今年は十三回目で八月二十六日から二十九日に開催しました。例年、県実行委員会作成のパネルと長岡で独自に作成したパネルおよび長岡戦災資料館から資料を借りて展示しています。さらに一般の方から平和への思いをこめた詩・短歌・俳句などを寄せていただき展示しています。今年は、うれしいことに希望が丘小学校六年生六十三名のみなさんが作品を寄せてくださり、私たちの運動の広がりを実感することができました。

今年の展示

今年はあらたに二名の参加を得て十二名で実行委員会を構成し、三月末より取り組みを始めました。まずは昨年を振り返り、今年はどうするかをフリーに話し合いました。その後ウクライナ戦争を念頭にテーマを「戦争はなぜ起こるの？ 平和をどう守るの？」とスローガン風に決め、その線に沿って内容を考えていくことにしました。

パネル展示は長岡コーナーにて大逆事件や生活綴り方事件、学童疎開などを九枚のパネルにして展示し、県実行委員会作成のパネルは三十三枚を、明治以降の朝鮮侵略から日中戦争そして太平洋戦争へと至る戦争の歴史を順にたどれるようにし、その間に、治安維持法・シベリア抑留・核兵器禁止条約に関するパネルを配し、最後は憲法九条と九十七条で締めくくるように展示しました。戦災資料館から借用したパネルは空襲体験画と被災写真

で、フロアーに焼夷弾（実物と模擬）・千人針・日章旗寄せ書きを展示しました。

フロアーではＤＶＤ上映もします。治安維持法と戦った人々を描いたものや日中戦争での戦争犯罪を証言したものなど、そして希望が丘小学校六年生の演劇ビデオです。希望が丘小学校は八月一日に平和学習をしており、その際に創作した短歌など六十三人の作品が寄せられ、子どもたちの素晴らしい感性に心打たれました。一般の方からは十二人に応募いただき、これらの作品は短冊風に印刷し五枚のパネルにしました。今年はウクライナ戦争に触発以された作品が多数ありました。

昨年はコロナ禍ゆえにできなかったことを今年は二つとも実現できました。一つは開会式でのバンド演奏と歌で、もう一つは講演会です。以前はミニ講演会を毎日実施していましたが、今回は二つで、一つは新潟大学名誉教授小山洋司さんの「ロシア・プーチンのウクライナ侵攻―歴史を通して考える」で、もう一つは上越市の弁護士田中淳哉さんの「『平和憲法を活かす』とはどういうことか～『攻められたらどうするのか？』という不安や疑問に真剣に向き合って～」です。前者は、ロシアとウクライナの複雑にからみあう歴史的関係を豊富な資料を駆使してお話しいただき、後者は抑止力の問題点と平和外交の重要性を憲法と関連してお話しいただきました。どちらも現下のウクライナ情勢にかかわり、時宜にかなった講演で参加者の高い評価を得ました。

さらに、新しい試みとして「戦争と教育」というテーマでフロアー座談会なるものもやってみました。十三人の参加でしたが、戦争の悲劇性と平和の尊さについて、そしてそれを後世にどう伝えていくかを話し合い、極めて有意義な時間を過ごしました。来年度につなげたいと思います。

後援について

取り組みにあたって最も気を使うことは長

岡戦災資料館との関係で、実行委員の中核であったNさんが資料館立ち上げ時から尽力していたことが幸いして資料館の信任も厚く展示品の借用などは極めて良好に推移してきました。今年は資料館でボランティアとして活躍しているTさんから資料館との関係を取り持ってもらいすべて滞りなくいきました。

今年の開会式の来賓挨拶では、資料館館長は戦争展開催の意義に触れ、戦争展を継続することの重要性と必要性について強調され、主催者としては非常に意を強くしました。

次に頭を悩ますことは長岡市の後援をいかに取り付けるかということです。これまでずっと後援を得てきましたが、一昨年に後援不承認ということがありました。その理由は、前年の展示パネルの一枚に直接的な政権批判があったからというもので、その後二度にわたって市の担当部署と懇談を重ね、昨年と今年は後援を得ることができました。

後援を得るにあたっての私たちの姿勢は、歴史修正主義や憲法に悖るようなことについてはそれをただすが、そうでない限りは平和行政・平和運動を共に推進していくというもので、この立場で市との折衝も懇談もしてきました。ただ、最近の反動的な動きの強まりの中で厳しさを増していることも事実です。さて、来年度はどうなるでしょうか。

次は、新聞社と放送局への後援と取材依頼です。地元の長岡新聞社をはじめ長岡に支局のある四新聞社と六放送局に後援依頼をします。今年は八社から後援をいただき、新潟日報社と長岡新聞社からは取材もあり、丁寧な記事も書いてもらいました。特に、長岡新聞社からは一面トップに大きく扱ってもらいました。

広報宣伝

戦争展をいかに多くの市民に知ってもらい、いかに会場に足を運んでもらうかは「戦争展」の性格上極めて重要な課題です。

歴史修正主義的書物が書店の店頭に平積みされるという世界的には特異な状況において、

その風潮を克服するためには歴史の実相を真摯に見つめることが何よりたいせつで、そしてそういう機会をできるだけ設けることだと思います。わずかな資料の展示にすぎませんが、例年の参加者のアンケートには「目を開かされた」「自分の不見識を知った」「自分を律する糧」などという言葉があり、特に中高生などから「学校や教科書では教えられない事実を知った」という声を聞くと、欠かせない取り組みです。それだけに、どうしたら多くの方に来てもらうか、特に中高生を中心とした若者の参加をどう促すかにいつも頭を悩ましています。

コミセンや図書館などの公共施設にチラシを置いてもらい、また各民主団体にもチラシの配布をお願いします。そして市内の学校への広報宣伝です。今年は小学校3校、中学校1校、高校9校と大学高専4校にお願いに行きました。

以前は敷居を高く感じるところもありましたが、最近はどこも快く受け入れてくれます。ただ、長岡市の後援があるかどうかが大きく影響していることも事実です。

今後の課題

より充実した「戦争展」にするためには、まだまだ課題が多くあります。終了後の実行委員会の総括で出された意見の中で最大の懸案と思われることを三点あげます。

一つはパネル展示において、一層の発掘調査の必要性とパネルの選定と展示方法の工夫です。

二つは実行委員の学力向上です。実行委員がそれぞれの得意分野を活かしながら「戦争展」の内容についてより深くより豊かに語れるようにしていくことが求められています。ある実行委員は会議に参加することが学習になると喜びを語っています。実行委員会が学習の場になり、互いに力を得、そのことが戦争展そのものを豊かに説得力あるものにしていくのだと思います。

三つは若者の参加を促すためにも学校への

丁寧な案内と日常的な取り組みを心掛けなければならないと考えています。

おわりに

いつも思うことは戦争加害の問題です。長岡は県内唯一の空襲被災都市で、従って戦争被害には敏感で市民の意識も高いものがあります。長岡市民に限らず、一般に被害意識は根強く、加害は弱いとはよく言われるところですが、しかし、戦争被害は突然降ってわいたものではなく、明治からの侵略戦争の果てに生まれたものです。ここに「戦争と平和」を考えるうえでの重要なカギがあります。私たちはこれをより判然とすべく努力していきたいと思っています。

（きくさき　たけし・長岡市）